

小藤

谷藤
岩藤

萩

かたぐ、かならずこと木によりて、たけ高き勢ひみするが、そのよりそふ木の枝もほもみえぬ計
におほひぬれば、その木もつひにかれぬるにぞ、われひとり心の心ばへみえて、木高く咲きみちぬ
とおもへば、嵐などにあふどき、もとよりかれし木なれば、うちたふれてけり、高うみえしはなも
つひにくさむらにうづもれて、またみる人もなし、代々の小人の情態にもたとへつべしと、ひと
のいひけり、

〔大和本草七花七草〕小藤。蔓草也、葉毛花毛藤ニ似テ小ナリ、花白シ、又紅モアリ、

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕谷藤。俗稱未詳

按谷藤蔓草也、葉似小梅葉而圓、三月葉間開花似紫藤花、

一種有岩藤。即此芫花也、詳于毒草類、

〔倭名類聚抄二十鹿鳴草〕爾雅集注云、萩一名蕭萩音秋、一音焦、蕭音宵、和名波。木。今按、枚名用萩字、音胡誤反、草名也、國史用芳宜草三字、楊

氏漢語抄又用鹿鳴草三字、並本文未詳、

〔撮壤集中鹿鳴草〕萩也、和

〔書言字考節用集六植〕萩本朝俗以天竺花爲萩、謬來舊矣、芳宜草順和

〔圓珠庵雜記〕はぎに二つあり、榛と萩となり、榛ははりの木といふを、俗にはんの木といふ、それを

はぎといふは、針の木といふべきを、りもじ真淵云、りもじを略すといふは、書きたる所を見てい

ばの言を略せりと書くべきなり、總て後人こを略せるなり、山のきし、川みぞのあたりにおほき

物なり、其皮をとりて物を染るを、はんの木染といふ、日本紀、日本後紀等に、褌摺衣といへるも是

なり、神樂歌にもさいばりに衣はすらんとよめり、今はよき人のきぬなど染むることは聞えず、

山里には猶用ふるなり、萬葉第七に、寄木として、此榛をよめり、然るに、萩にもまた萩が花ずりとよ

めば、いよく、人までへり、遠里をの、眞榛もて、又白菅の眞野の榛原とよめるは、萩にはあらぬ